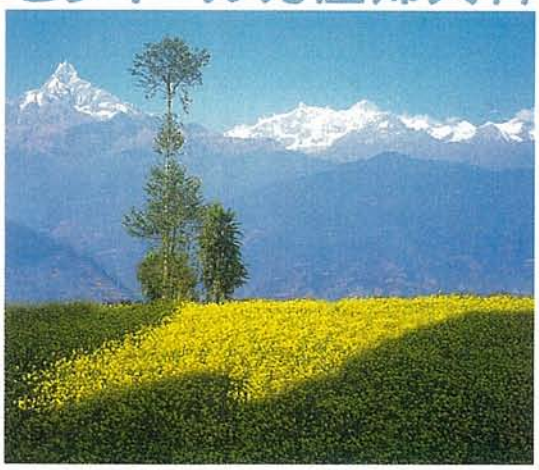
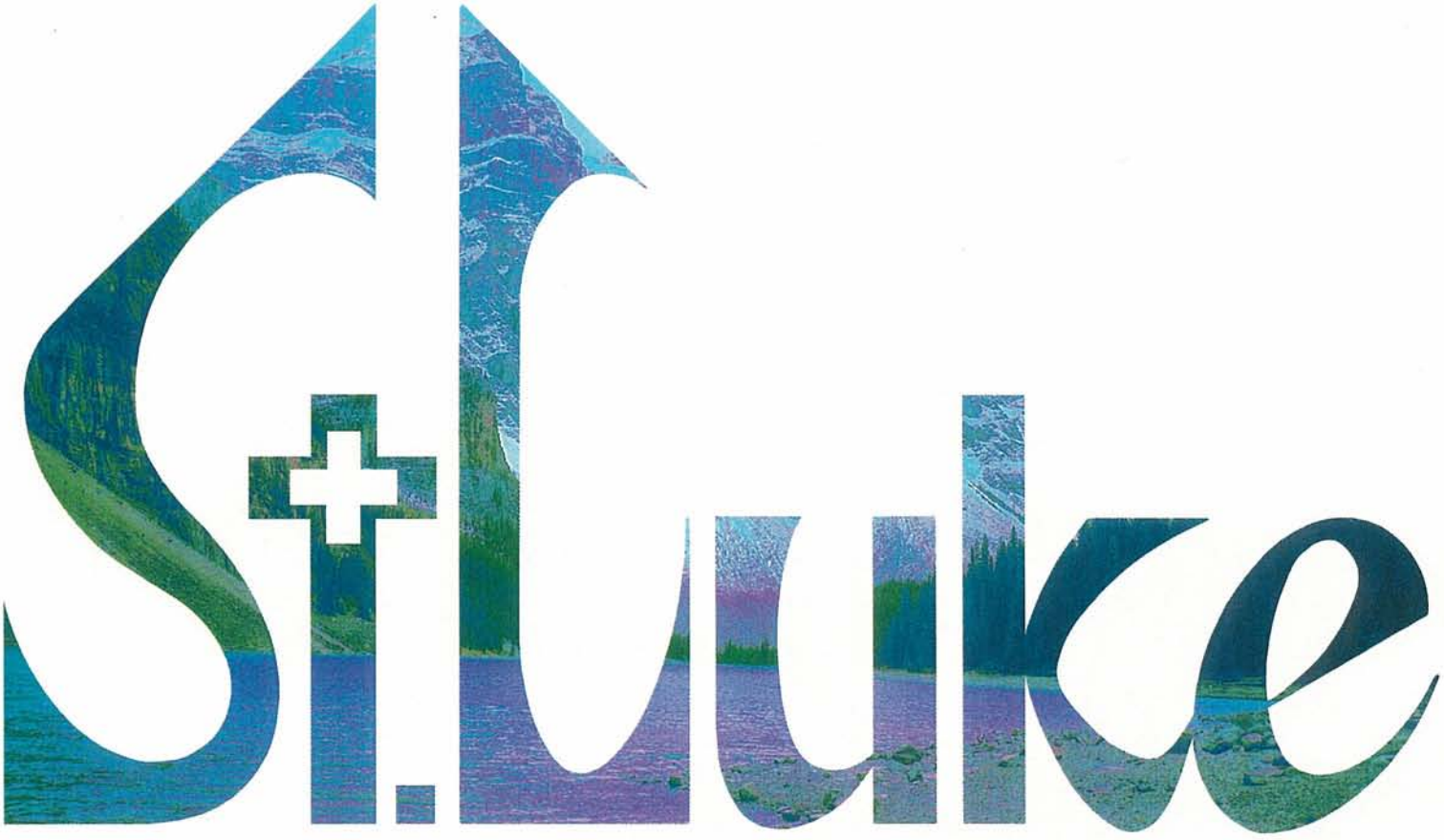
開院5周年記念誌

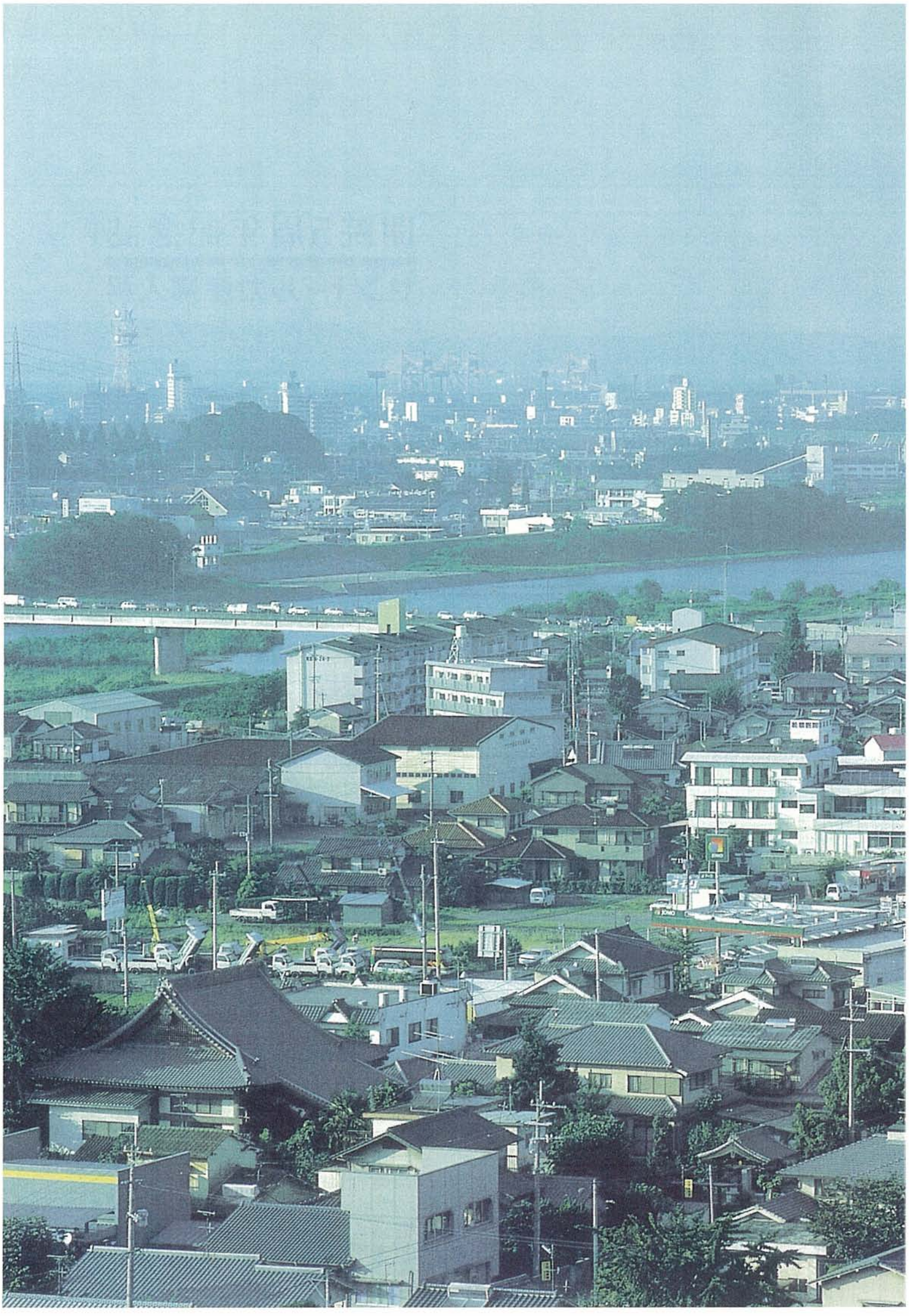
セント・ルカ産婦人科

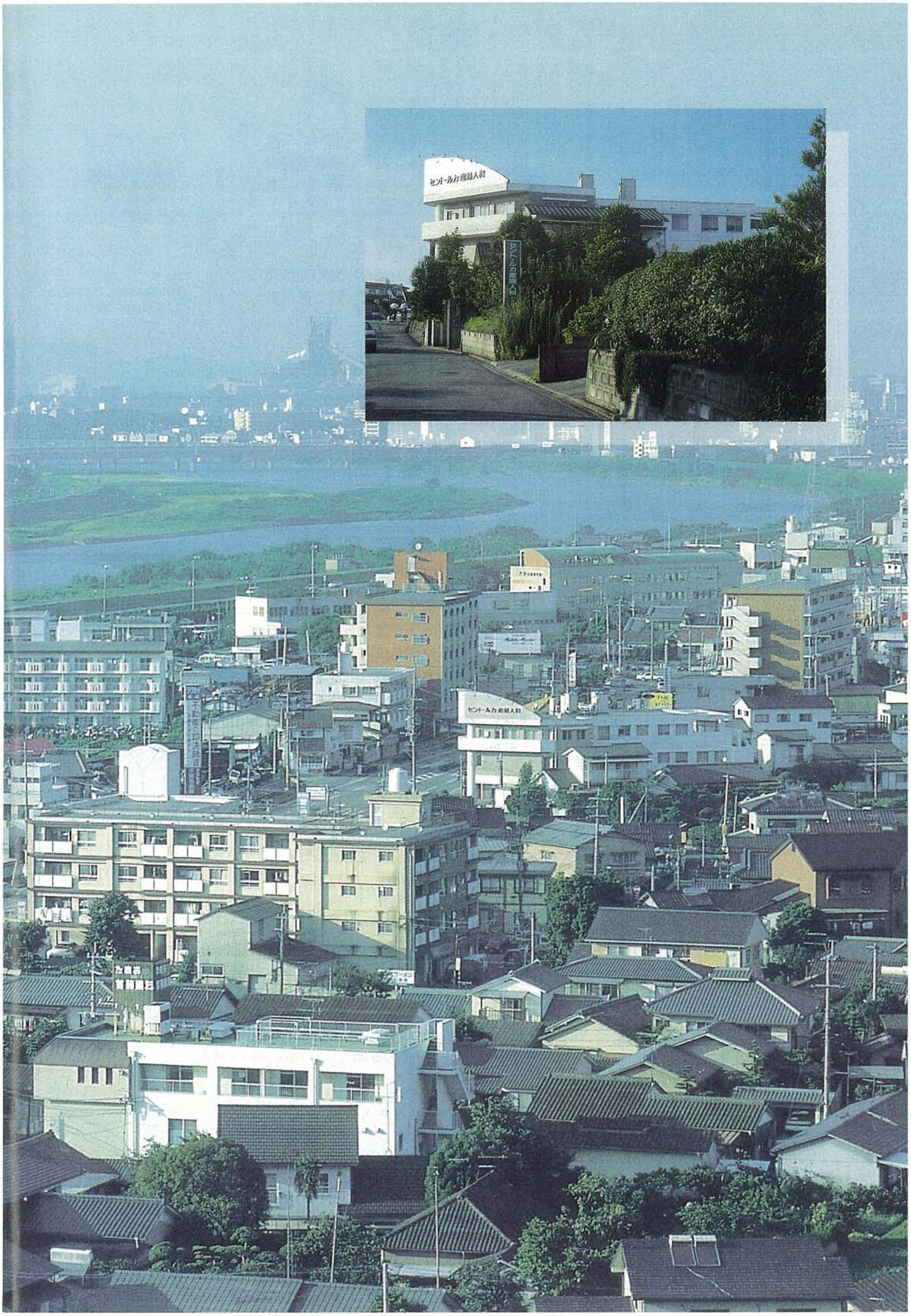




開院5周年記念誌

セント・ルカ産婦人科




セントールカ産婦人科
セントールカ産婦人科
セントールカ産婦人科

目次

病院概要・沿革 …… 1

巻頭言 …… 2

外来・入院数 …… 4

妊娠数 …… 6

研究室の流れ …… 12

情報処理室システム開発・運用 …… 14

診療データ管理システム構成図 …… 15

学会発表一覧 …… 16

論文一覧 …… 21

著書一覧・主催講演会一覧 …… 23

講演一覧・翻訳一覧 …… 24

見学・院内講習会参加一覧 …… 25

学会・講演参加一覧 …… 26

不妊診療に携わって …… 28

行事一覧 …… 32

セント・ルカ セミナー …… 37

新聞記事より …… 44

写真でふり返るセント・ルカの５年 …… 47

病院概要

名　　称	医療法人セント・ルカ「セント・ルカ産婦人科」
開設年月日	1992年６月３日
住　　所	〒870　大分市津守富岡５組 tel. 0975-68-6060 fax. 0975-68-6299 E-mail. sentluke@fat. coara. or. jp
許可病床数	11床
職 員 数	総数31名 常勤医　１名　　情報処理室　２名 研究室　４名　　事務部　　２名 検査室　３名　　調理師　　２名 看護婦　10名　　栄養士　　１名 准看護婦５名
診療時間	月、水、金：９：00～12：00、17：00～19：00 火、木、土：９：00～12：00

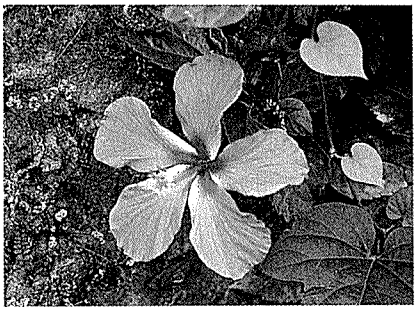
沿革

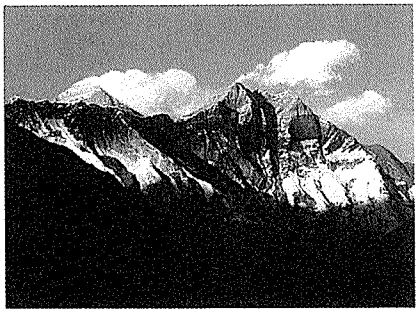
1992年　５月28日	定礎式
６月３日	診療開始
６月13日	腹腔鏡手術開始
６月27日	開院披露
７月27日	体外受精開始
10月１日	顕微授精装置設置
10月６日	体外受精妊娠成功
1993年　２月１日	ミリＱシステム導入
３月25日	ＧＩＦＴ妊娠成功
４月１日	日本不妊学会評議員
６月10日	体外受精出産
10月12日	顕微授精（ＰＺＤ）妊娠成功
10月22日	プログラムフリーザー設置
1994年　７月１日	凍結胚移植妊娠成功
９月24日	ＩＣＳＩ妊娠成功
12月１～10日	研究室改造
1995年　１月１日	医療法人認定
10月６～12日	研究室改造
11月９日	ＲＥＳＡ－ＩＣＳＩ妊娠成功
1996年　３月７日	妊娠成功1000例
６月１日	病院専用駐車場開設
1997年　２月６日	「聖書の学び」開始
６月21日	情報処理室開設

巻頭言

早いものでセント・ルカ産婦人科が開院してもう５年になる。この５年間に約6200人の患者さんが来院し、そのうち、挙児希望の3004人のうち、1372人に妊娠が確認された。治療途中で来なくなったのが1267人であるからそれを除くと実妊娠率は71.4%になる。残りの30%弱は治療中であるから、そのうちの70%が妊娠するとすればすぐに90%をこえる妊娠率が期待できる。今では赤ちゃんがほしいカップルの90%以上がその望みがかなえられるようになった。

この５年は、いや、それ以前から何か大きな力につき動かされ、守られてきた感がある。ちょうど10年前、私はトライアスロン（水泳3.2km、自転車180km、マラソン4.2km）の競技中、事故で頸椎の３番と胸椎の７番を骨折した。普通なら即死、運がよくて半身不随と言われたが、まったく後遺症なく回復した。入院中に家族ぐるみで親しかった内科の先生が39歳の若さで亡くなった。またとなりの病室のエホバの証人の患者さんが輸血を拒否して亡くなった。どちらも私と同じくらいの年代であった。そしてなぜ彼等は死んでいったのに自分は生きているのかと考えるようになった。そして自分はやり残した宿題があるから、神様が「もっと働け」といわれているからだと思った。そしてそれは不妊症診療であろうと思った。また、トライアスロンを完走したように、当時は何にでも自信があったし、また当然医療面でも傲慢な点があったことは否めない。しかしそのようなわたしが半年もの間、患者の立場になったことは医療従事者として本当にいい経験になった。また入院中、お見舞に来てくれた350人のかたがたの名前のメモをみて「この方々に支えられて自分がある」と本当にありがたく感じた。そして退院して聖書の勉強後、洗礼を受けた。16年間過ごした九大温研から県立病院に移り、さらに不妊症診療を完成するべく、セント・ルカ産婦人科を開院した。この病院名は聖書に因んでいる。名前をつけるとき、まず、不妊症診療という性格上、個人名よりもむしろパブリックな感じのほうがスタッフにも、患者さんにもよかろうと思った。そして、それ以上に聖書にちなんだ名前がほしかった。そして聖書の著者のひとりでもあり、医者でもあった「ルカ」の名前をいただいたのである。





このようにして多くの方々と神様に支えられてライフワークである不妊症診療を思いっきり行うことが出来るわたしは本当に幸せである。しかしこの５年間の積み重ねでいくつかの私たちが解決しなければならない点が次第に明らかになってきたように思

う。ひとつは最先端医療としての不妊症診療の質の向上であり、もうひとつは社会問題として不妊症をとらえることである。私たちは不妊症診療を最新のテクニックと知識でもっておこなうべきであり、そのために常に世界の動向を視野にいれておく努力をせねばならない。また、近年の少子少産問題は近いうち少なからず各方面に影響が出てくると思われるが、その論議がなされるとき、不妊症が話題になっているのをみたことがない。私たち不妊症診療に携わっている医療従事者はあらゆる機会をとらえて専門的な立場からこの問題をアピールしていかなければならない。それが私たちの使命であると思う。

宇津宮　隆　史